

## 寒か塞か : 穂積皇子悲傷流涕作歌考

著者名(日)	川上 富吉
雑誌名	大妻国文
巻	47
ページ	1-20
発行年	2016-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00006172/">http://id.nii.ac.jp/1114/00006172/</a>

## 寒か塞か

——穗積皇子悲傷流涕作歌考——

川  
上  
富  
吉

一、『万葉集』卷第二、二〇三番歌の本文と訓について

『定本萬葉集』卷第二（昭和十五年二月、佐佐木信綱・武田祐吉編）に、

但馬皇女薨後穗積皇子冬日雪落遙望御墓悲傷流涕御

作歌一首

零雪者安播尔勿落吉隠之猪養乃岡之塞爲卷尔

但馬皇女薨り給ひし後、穗積皇子の、冬の日雪の落るに、

御墓を遙望け悲傷流涕きて作りませる御歌一首

二〇三零る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の塞たらまくに

寒か塞か

とある。この定本作成のための校本作業の集積が『校本萬葉集』（底本は、寛永版本。大正十三年。増補版昭和七年、新増補版昭和五十四年〜五十七年）であつて、その本文・訓・諸説を写しておく。

〔二〇三〕  
金細神  
類矢温西  
古無附

○古主文ヲ訓交リニ書ケリ。  
袖中抄第十六、万葉ニフルユ  
キハアハニナフリノヨコモリ  
ノ平ガヒノセキニセマクニ  
冬日雪落云々

フルユキハアハニナフリノヨコモリノ平ガヒノヲカノ  
零雪者安幡爾勿落吉隱之猪養乃岡之塞爲  
卷爾

〔本文〕(一)零、古訓ヲ主文トセリ。(二)者、古訓ヲ主文トセリ。(三)幡、  
金類、古、神、西、播、無、幡。(四)爾、類、コ、ノ、下、句、アリ。(五)勿落、古訓ヲ主  
文トセリ。(六)吉、神、去。(七)塞、金、塞。  
訓(一)ヨコモリノ類、みこもりの。墨ニテ、みヲ消セリ、ソノ左ニ墨  
よアリ。神、ミコモリノ。(二)井カヒノヲカノ類、みかみのたかの。  
〔は〕塞爲卷爾、金訓、せきにすせまくにアリ。類訓、せきにせまくに  
アリ。古、神、西、細、矢、京、右ニセキニセマクニアリ。矢、京、七字、青。  
諸説 ○安幡爾勿落、アハニナフリノ。童、アハニナフリノ。考、安  
ハ、佐ノ誤。訓、サハニナフリソ。○ヨコモリノ、代、初、フナハリ  
ノ、代、精、ヨナハリノ。○塞爲卷爾、童、セキニナラマクニ。考、セ  
キナラマクニ。檜、塞爲ハ、塞有ノ誤。訓、サムカラマクニ。

次に、その問題となる『御物金澤本萬葉集』（日本古典文学会編・複製本）の本文と訓、及び釈文を写しておく。

零雪者安播尔勿落吉隱之栞養乃岡之寒  
爲卷尔

零雪者安播尔勿落吉隱之栞養乃岡之寒  
爲卷尔

203 零雪者安播尔勿落吉隱之栞養乃岡之寒<sup>(ママ)</sup>

爲卷尔

ふるゆきはあはになふりそよこもりの  
ぬかひのをかのせきにませまくに

寒か塞か

この金沢本の本文の「塞<sup>①</sup>」、微妙な筆跡で、「ミ」とも「土」とも読める。訓は「せき」とあるから、臨書した親本には「塞」とあったが、初句「零雪<sup>ふるゆき</sup>は」とあるのにひかれて「寒<sup>さむ</sup>」と書いてしまったとも考えられる。<sup>②</sup>

また、『校本』諸説に、

檜、「塞為」ハ「寒有」ノ誤。訓「サムカラマクニ」。

とあるが、橘守部『万葉集檜婦手』<sup>(3)</sup>卷四に、

零雪者。安幡爾勿落。吉隱之。猪養乃岡之。寒有卷爾。<sup>フルニキハ。アハニナフリ。ヨナバリノ。ヰカヒノワカノ。サムカラマクニ。</sup>

○寒有卷爾<sup>サムカラマクニ</sup>「さむからん」と云なり。今寒爲卷爾と訓たれど、むげに聞えず。端書にも合はざれば、向<sup>サキ</sup>に考へて萬葉緊要にも出しつ。

とあり、『萬葉集緊要』<sup>(4)</sup>卷上には、

「ふる雪はあはになふりそよなばりの猪かひの岡の寒からまくに。」

此御歌、諸抄の訓、すべて通えがたし。結句の塞の字は、寒を誤れるにて、皇女の御墓の寒からんに、ふる雪は、多く勿つもりそ、との給ふなり。

とあり、いずれも「金沢本」には言及していない。

木村正辭『萬葉集美夫君志』<sup>(5)</sup> 卷二下に、本文「塞<sup>セキナラマクニ</sup>為<sup>セキ</sup>卷<sup>オカ</sup>爾<sup>マシヲ</sup>」とし、

○塞<sup>セキナラマクニ</sup>為<sup>セキ</sup>卷<sup>オカ</sup>爾<sup>マシヲ</sup>、塞は字の如くふさぐ意にて、古事記上卷に逆<sup>サカサマニセキダテ</sup>二塞<sup>セキ</sup>上天<sup>セキ</sup>安<sup>セキ</sup>河<sup>セキ</sup>之水<sup>セキ</sup>而云々、本集卷三<sup>五十</sup>六<sup>左</sup>に、妹<sup>イモ</sup>乎<sup>モ</sup>將<sup>シ</sup>留<sup>ル</sup>

塞<sup>セキ</sup>毛<sup>モ</sup>置<sup>オカ</sup>未<sup>マシ</sup>思<sup>シ</sup>乎<sup>ヲ</sup>などあり、又廣雅釋詁三に、關<sup>セキ</sup>塞<sup>セキ</sup>也ともあり、一首の意は、皇女の御墓仕へ奉る人の行通はむに、ふる雪の安<sup>ア</sup>幡<sup>ハ</sup>にふりたらむには、御墓所の猪養の岡に行かよふ道の關<sup>セキ</sup>となりて、通ひ難からむとなり。

橘<sup>キ</sup>守部の萬葉緊要に、此御歌、緒抄の訓すべて通<sup>キ</sup>えがたし、結句の塞の字は、寒を誤れるにて、皇女の御墓の寒からむに、ふる雪は多く勿<sup>ナ</sup>ふりそとなりといへるは、いかにも哀れに聞えて情探し、故に今一説として出しぬ。

とあつて、守部の「塞」説を紹介しているが、これまた、「金沢本」にはふれていない。<sup>(6)</sup>

なお、『校本』に漏れた、「廣瀬本」は、「本文、塞。訓、セキ」、「神宮文庫本」も「塞<sup>セキ</sup>」となつてゐる。

なお、『萬葉集美夫君志』以前の北村季吟『萬葉拾穂抄』・契沖『萬葉代匠記』（初稿本・精撰本）・荷田信名『萬葉集童蒙抄』・賀茂真淵『萬葉考』・橘千蔭『萬葉集略解』・上田秋成『萬葉集檣の杣』・岸本由豆流『萬葉集攷証』・鹿持雅澄『萬葉集古義』、いずれも「塞・せき」で、橘守部の二著のみ「寒・さむ」としている。また、渋谷虎雄『古文獻所収萬葉和歌集成』に拠れば、五代集歌枕・類聚萬葉・勅撰名所要抄・十四代集歌枕・一葉抄・勅撰名所和歌抄、など「せき・塞<sup>セキ</sup>」であり、「寒・さむ」はない。『詞枕名寄』（渋谷虎雄編『校本詞枕名寄』に、古典文庫本『歌枕名寄』（高松宮本）「寒」、宮内庁本「塞<sup>セキ</sup>」とある。）・『名所風物抄』（愛知県立大学附属図書館蔵、写本、成立年時編者ともに未詳）「寒」とある。

以上、古写本・古注釈など明治末までを概観したが、以下、便宜上、何期かに分けて例示したい。

## 二、木村正辭『萬葉集美夫君志』から『定本萬葉集』まで

大正から昭和十五年までの主要なものを見るに、「塞（せき）」とするもの、

土岐哀果編『萬葉短歌全集』・土岐善麿編『作者別萬葉全集』・下村健治『掌中萬葉集全』・藤澤古實・廣野三郎編『萬葉集』・井上通泰『萬葉集新考』・塚本哲三『萬葉集上巻』（有朋堂文庫）・佐佐木信綱『新訓万葉集』（岩波文庫）・鴻巣盛寛『萬葉集全釋』・山田孝雄『萬葉集講義』・『萬葉集総釋第二』（土屋文明）・金子元臣『萬葉集評釋』・斎藤茂吉『万葉秀歌』（岩波新書）。この中、金沢本・守部説に言及しているのは、

金澤本だけは、塞が寒になつてゐる。……文字を改め過ぎるから従はない。（『全釋』）

金澤本には「塞」を「寒」とせり。されど他本はすべて「塞」にして「寒」字としてよむ方法明かならねば、なほ本のままにてよみ方を考ふべし。〈中略〉檜婦手は又「寒有卷爾」の誤として「サムカラマク」とよみたり。されど、此の誤字説は従ひがたし。「塞」は金澤本に「寒」とあれど、その訓は「セキ」とあれば、誤寫なること明かなり。

（『講義』）

金沢本には、「塞」が「寒」になつているから、新訓では、「寒からまく」と訓んだ。〈中略〉結句の「塞なさまくに」は強く迫る句である。（『秀歌』）

「寒」とするもの、

佐佐木信綱編『萬葉集』（大日本文庫文学篇。頭注（山本正秀）、金沢本と檜婦手による）・折口信夫『口譯萬葉集』・菊池壽人『萬葉集精考』など少数。

寒爲卷爾——舊本には此句の訓はない。〈中略〉檜婦手は「塞爲」を「寒有」の誤として「さむからまくに」と訓んで

るが、實際金澤本には「寒」とあるし、〈中略〉但、訓はやはり「せき」とあるから、なほ考慮を要する。（『精考』）

### 三、『定本萬葉集』以後、一九五〇年まで。

「塞（せき）」とするもの、

佐野保太郎・藤井寛『註解萬葉集』・窪田空穂『萬葉集評釋』・武田祐吉『萬葉集全註釋』。

塞爲卷爾 サムカラマクニ セキラマクニ。寒有卷爾（檜）檜婦手に、塞爲を寒有の誤とし、〈中略〉金澤本にも塞を寒に作つてゐる。〈中略〉原文のまゝで訓を下すとすれば〈中略〉今已むを得ずしばらくセキラマクニと讀んでおく。（『評釋』）

「寒（さむ）」とするもの、

『萬葉集』（朝日古典全書。佐伯梅友・藤森朋夫・石井庄司校注。）・佐佐木信綱『評釋萬葉集』・澤潟久孝・佐伯梅友編『新校萬葉集』。

寒からまくに 白文「塞爲卷爾」。金澤本と檜婦手の説により「寒有卷爾」とする。（『評釋』）

### 四、一九五〇年から二〇〇〇年まで

「塞（せき）」とするもの、

澤潟久孝『萬葉集注釋』・土屋文明『萬葉集私注』・武田祐吉『萬葉集全講』・久松潜一『万葉秀歌』（講談社学術文庫）・澤潟久孝・佐伯梅友編『新版新校萬葉集』。

私はさきに新校にも大成本の本文篇にもサムカラマクニと訓んでおいた。しかしその後なほよく考へるに、それは



「塞爲」では意味の通じない場合の處置として十分考へられるといふにとゞまり、「塞爲」と「寒有」といづれが原本の文字であるか、もう少し根本的に考察の必要があるやうに思はれた。まづ「塞」と「寒」との文字を較べると今日の活字としてはやゝ離れてゐるが、筆寫の文字としては極めて相接近した字形である事金澤本の書體を見てもわかるが、しかも誤寫の順序からすれば「塞」より「寒」へと考へる事が、その逆よりも自然である事〈中略〉「塞」を「寒」の誤とする事に躊躇が感ぜられるのみならず「寒」とあるが金澤本ただ一つであるといふ點にも疑が持たれる。且つ金澤本にもかな書の方は「せきにませ<sup>△</sup>なくに」——「ま」は万の草假名と見られる字で、「に」の變體假名「じ」の重複からまちがつたものと思はれるから衍字と見るべきである——とあつて他の古寫本の訓セキニセマクニと同様と見られる事からも「寒有」が「塞爲」に誤り訓もセキニセとなつたとは考へにくいやうに思はれる。〈中略〉金澤本以外の類、古、紀、等の諸本すべて「塞爲」とあり、訓もセキニセとあるから、たゞ金澤本に一つ「寒」とあるを據り處として「塞爲」の文字もセキニセの訓もすべて誤と斷ずる事は輕率であり、やはり「塞爲卷尔」を原本の文字として訓釋を考へるべきだと思ふ。〈中略〉「塞成さまくに」の訓釋が初二句に對して適切である事がうなづかれよう。作者は遙に御墓の方を眺めやつてゐるので、今お墓へ參らうとされてゐるのではない。しかし作者の心はいつもその道をゆきかやうてゐるのである。だから何程の道のさへぎりにもならないはずの降雪にもかうした心が動くのである。

〔注釋〕

塞有卷爾 「塞」は「寒」となつてゐる本文もある。『金沢本万葉』は訓に「せきにませまくに」と訓じてあるが、文字は「寒」らしい字になつてゐる。「寒」とすると「サムカラマクニ」と訓じられる。古訓には「セキニセマリニ」とある。『新校万葉集』では「寒」として「サムカラマクニ」と訓じてあるが、『定本万葉集』では「塞」に従い、「セキタラマクニ」と訓じてゐる。古注釈書を見るに『万葉童蒙抄』では「セキニナラマクニ」とし、『万葉考』では「セキナラマクニ」と訓じてあるが、『檜爪』は「寒有」の誤りとし、「サムカラマクニ」と訓じてゐる。このように

して両説は併立している。ただ諸本に「塞」とあり、「金沢本」でも訓は「セキ」とあるのであるから、「塞」の方が妥当性が多いのではないかと思う。『古典文学大系本』では「寒」として「サムカラマクニ」としており、沢瀉氏等の『新校万葉集』でも同様であるので、それにも十分心を引かれるが、「塞」でも意味が通ずる上に、諸本も「塞」が多いのでそれによっておく。

塞ならまくに 本文の字が問題になるが、「塞」をとり「せきならまくに」と訓じておく。そうすれば意味は自分のいる所と御墓のある猪飼の岡との間を雪がつもつて塞のように通れなくするの意である。寒いの方はわかりやすいが、塞の方が理が通っている。(久松『秀歌』)

「寒(さむ)」とするもの、

『萬葉集大成・本文篇』・日本古典文学大系『萬葉集』・塙書房版『萬葉集』・日本古典文学全集『萬葉集』・桜楓社版『萬葉集』・土橋寛『作者別万葉集』・新潮日本古典集成『萬葉集』・中西進『万葉集全訳注原文付』(講談社文庫)・校注古典叢書『萬葉集』・稲岡耕二『萬葉集全注卷第二』・完訳日本の古典2『萬葉集』・伊藤博『万葉集』(角川文庫)・桜井満『万葉集』(旺文社文庫)・中西進『万葉集歌人集成』・新編日本古典文学全集『萬葉集』・伊藤博『萬葉集釋注』・和歌文学大系『萬葉集』・新日本古典文学大系『萬葉集』など多い。

寒からまくに―寒くあるだろうことゆえ。寒いだろうから。(中略)ここは塞為卷尔とある本文が多いので「塞(きせ)なさまくに」と訓んで、雪が関となつて、お会いしに行けなくなるだろうからと解する意見もある。「大意」降る雪はたくさん降らないで下さい。恋しい但馬皇女の眠っている猪養の岡が寒いだろうから。(『大系』)

寒からまくに―原文底本「塞為卷尔」とあるが、「寒有卷尔」の誤りとする。(『古典文学全集』)

寒からまくに 原文は底本に「塞為卷尔」とあり、セキナサマクニ(『古義』『注釈』など)とも読まれてきた。しかし金沢本には塞が寒となつており、それによって為を有の誤字と見る橘守部『檜婦手』の説が最も有力と考えられる。

〔校注古典叢書〕

寒からまくに 結句の原文、西には「塞為卷尔」とあり、セキナラマクニ（考）ともセキナサマクニ（古義・注釈）とも訓まれている。しかし、金には「塞」を「寒」と記しており、檜婦手では次の「為」を「有」の誤写として「寒有卷尔」と訓んでいる。「為」と「有」との誤写は卷十・一九八六の紀州本など例は少なくないので、この誤字説の可能性も認められよう。問題は古写本の大部分が伝える「塞為卷尔」が正しいか、金沢本の「寒」を尊重して次の「為」を「有」の誤字とするのが正しいかにある。確かに大部分の写本にセキニセマクニの訓を見るのは、原文を「塞為卷尔」と伝えていることともに重視されるべきである。金沢本の原文「寒為卷尔」とありながら、かな書きの方には「せきに」となっているのも、もと「塞」とあったのではないかと考えられそうである。しかし、〈中略〉金沢本に「寒」とあるのは、貴重である。おそらく本来は「寒」であって、それが「塞」に誤られたのではなからうか。この卷二において、金沢本にのみ正しく原本の文字を伝えていると思われる例：（『全注』）

寒からまくに―寒カラマクは寒クアラムのク語法。原文は底本など大部分の古写本に「塞為卷尔」とあるが、金沢本のみ「寒為…」とある。訓は金沢本を含めた全古写本に「せきに…」と読んでいるが、訓が必ずしも漢字本文に忠実でなく独走し、やがて古写本筆者がその訓に合わせて本文を捏造することが少なくない（解説四一七頁）。ここも「寒」を原本の姿と認める。ただし、「為」は草体が「有」のそれに近く相互に誤りやすいため、「有」の誤字とする説に従う。（『新編全集』）

寒くあらまくに 「まく」は推量の助動詞「む」のク語法。底本の原文「塞為卷尔」により、セキナサマクニと訓み、「吉隠の猪養の岡への道のさへぎりとならうからに」と解する説（『古義』『注釈』）もある。ここでは、金に「塞」を「寒」に作り、『檜婦手』に「為」を「有」の誤字と見るのに拠る。「為」と「有」との異同は、古写本にしばしば見られる。（『釋注』）

結句「寒からまくに」の原文「寒有卷尔」は、「寒」の字、金沢本に拠る。諸本「塞」。「有」は、諸本「為」とあるが、「有」の誤字と見る檜婦手の説に従う。（『新大系』）

五、二〇〇一年以降、現在（二〇一六年）まで

「塞（せき）」とするもの、

和田嘉寿男『万葉集卷二を読む』のみ。

結句の「塞なさまくに」をめぐって、異論があります。もともと、この部分は諸本、原文「塞為卷尔」とあり、セキナサマクニでよいと思うのですが、金沢本のみ「寒為卷尔」とあり、これをとってサムカラマクニとよんで、「（猪養の岡が）寒いだろうから」と解釈する説が多いようです。

「寒（さむ）」とするもの、

阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』・多田一臣『万葉集全解』・岩波文庫『万葉集』・岩波文庫『原文万葉集』。

寒からまくに 金沢本に「寒為卷尔」とあるほかは、「塞為卷尔」。旧訓セキニセマクニ。童蒙抄セキニナラマクニ。考セキナラマクニ。注釈セキナサマクニ。現在は、金沢本により、かつ「為」を「有」の誤字として、サムカラマクニあるいはサムクアラマクニの訓が多くとられるようになった。マクは、推量の助動詞ムのク語法。寒いだろうから。セキニセマクニの訓は、その雪を皇女を現世に引止める塞にしたいととるもので、セキニナラマクニ・セキナラマクニ・セキナサマクニの類は、皇女と作者との間を隔てるものとなるだろうから、の意であるが、サムカラマクニの人間的な感情の素直な表現に及ばないと思う。（『全歌講義』）

寒からまくに―「まくに」は、推量「む」のク語法。なお、底本等の原文は本来「塞為卷尔」とあり、これを「セキナ

サマクニ（塞<sup>せき</sup>為<sup>な</sup>さまくに）と訓み、「降り積もる雪が猪養の岡への道を塞ぐ関になってしまふ、だから雪よ多くは降つてくれるな」と解する説もある。（『全解』）

## 六、「塞」説と「寒」説のまとめ

以上、「塞」説・「寒」説の概要を通覧したが、『定本萬葉集』以降で、「寒」説の主要なものは、菊池壽人『萬葉集精考』（昭和十（一九三五）年七月）である。だが、「なほ考慮を要する」としている。その後、「寒」説から「塞」説に変えた澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第二』（昭和三十三（一九五八）年四月）、および久松潜一『万葉秀歌（一）』（昭和五十一（一九七六）年六月）の「塞」説の的確な説明があったが、稲岡耕二『萬葉集全注 卷第二』（昭和六十（一九八五）年四月）は、「金沢本の原文「寒為尔」とありながら、かな書きの方には「せきに」となっているのも、もと「塞」とあったのではないかと考えられそうである。」「この巻二において、金沢本にのみ正しく原本の文字を伝えていると思われる例」として挙げているのは「呼」「母」の二例でいずれも助詞で、「塞」「寒」などの正訓字ではないので、例証とはならない。この前後、「寒」説の主要なテキストに日本古典文学全集『萬葉集（一）』（昭和四十六（一九七二）年一月。校注・訳者 小島憲之 木下正俊 佐竹昭広）、その新編日本古典文学全集『萬葉集①』（平成六（一九九四）年九月。校注・訳 小島憲之 木下正俊 東野治之）がある。全集本の頭注に、

原本底本「塞為卷尔」とあるが、「寒有卷尔」の誤りとする。

とあって、金沢本・桧婦手・緊要に言及していない。不審。新編全集本に至って、金沢本の影印を載せているが、訓の部

分が削除されている。これも不審。なお、頭注に、

訓が必ずしも漢字本文に忠実でなく独走し、やがて古写本筆者がその訓に合わせて本文を捏造することが少なくない  
(解説四一七ページ)。

とあり、「解説四一七ページ」古写本の意改の項の要点を引用すると、

総じて古写本には誤字がつきものである。書本<sup>かきほん</sup>自体が誤っていることや、中に判読できない字が混じっていることもあるし、写し手の側についても学力や体力の不足、疲労などの原因で誤写することもある。誤字・誤脱<sup>えんじ</sup>・衍字<sup>えんじ</sup>・文字転倒など、人間である以上、過ちは避け難い。それを世に魯魚<sup>ろぎょ</sup>または焉馬<sup>えんば</sup>の誤りという。言うなれば無意識の誤りである。

無意識でない故意の、写し手の賢<sup>さか</sup>しらの本文改変、意改であり、後世のわれわれにとって複数の字面のいずれを採るべきか迷う場合である。

平安期の歌人たちが彼等の作歌の参考に万葉集の歌を利用することはあっても、その万葉歌は、時に平安朝人の好みで歪<sup>ゆが</sup>められていて、後世人のわれわれから見てもそれなりによくも読んだものと感心することがあるが、一字一字に忠実に学問的に正確に読んだとは限らない仮名書の抄出本によったものだ、ということである。

本文に二通り以上の伝来がある場合、概して訓と合うほうが二次的な形と疑ってよいのでないか、という予想が立てられそうである。

とあるが、例に、「二〇三」の金沢本に関する文証はない。頭注との整合性のなさは、金沢本における本文と訓との違背を立証したことにはならないと思考する。この「解説」の筆者が誰か明記はされていないが、「校注、訳」の三人の中のどなたかにしろ、協議の末のものと思われる。旧・新、二書の校注・訳者の共著である塙版『萬葉集 本文篇』（昭和三十八（一九六三）年六月）の凡例付記に「本書に示された本文批判および訓について、著者三人は責任を分担すると共にそれらの見解の根拠を遠からず本書の研究篇に収めて発表する予定である。」と、『訳文篇』（昭和四十七（一九七二）年三月）の凡例に「本文篇の凡例に予告した研究篇の刊行には、なお年月を要するであらう。」とあり、現在（平成二十八年（二〇一六）年一月）未刊である。また、新日本古典文学大系『萬葉集』（平成十一（一九九九）年五月、佐竹昭広、他校注）、それに準拠する岩波文庫本『萬葉集』（平成二十五（二〇一三）年一月）・『原文萬葉集（上）』（平成二十七（二〇一五）年九月）いずれの解説にも「二〇三」の金沢本の本文・訓についての言及なし<sup>7</sup>。明確な説明責任を期待すること大である。また、「寒」説が通説定説化すること大いに危惧を抱いている。

## 七、おわりに

ちなみに『新編国歌大観』（第二巻私撰歌集。昭和五十九（一九八四）年三月）の凡例に、万葉集については、「西本願寺本を底本とし、本文の右に西本願寺本による訓を、左に現代の万葉研究の立場で、最も妥当と思われる新訓を施した。」として、

フルユキハ  
零雪者  
ふるゆきは

アハニナフリッ  
安播尔勿落  
あはになふりそ

ヨゴモリノ  
吉隠之  
よなぼりの

井カヒノヲカノ  
猪養乃岡之  
みかひのをかの

セキセマクニ  
塞為卷尔  
さむくあらまくに

となっている。これによれば、現代、金沢本と守部の二著に拠る「寒有」を本文とし「寒くあらま<sup>さむ</sup>くに」と訓むことを妥当と認めているということになる。果してそれでいいのだろうか。一犬虚に吠え、万犬従うの現状、看過黙視するわけにはいかない。

先ず第一に、金沢本の「寒」が正しいとするならば、「寒」とする写本が、他に、二、三種あつてしかるべきであるが、金沢本唯一ということをどう説明するのか。第二に、金沢本の訓「せき」とあり、「さむ」とよむのは守部の二著のみで、諸本「せき」であることをどう説明するのか。第三に、本文と訓が相違する場合は、本文を優先するということか。平安朝に入つて、萬葉集の本文の訓読が重要視されていたはずで、梨壺の五人以来の訓点史が、そのことをよく語つていよう。なお、近年、この問題を解決する貴重な論考が発表されている。それは、小川靖彦の、

「書物」としての萬葉集古写本―新しい本文研究に向けて（「継色紙」・金沢本萬葉集を通じて）

（『萬葉語文研究 第7集』（平成二十三（二〇一一）年九月）所載。）

である。その精緻明解な実証的論理的な考究の要点を次に示しておく。

- 1、（金沢本の筆写者）定信の書は速度感のある運筆によつて、一字一字の形に拘泥せずに全体の流れの美しさや筆脈の力強さを表現する。
- 2、金沢本は界線を引かない紙面を大きく使い、漢字も「かな」も同じ筆で速く書き、料紙の唐紙の文様との調和も考慮して字形を変化させ、見開きの一面を躍動的な空間としている。
- 3、金沢本の漢字本文には多数の誤字もあり、その多くは金沢本のみに見える。



4、字形の類似による誤字が34箇所程度、脱字が7箇所程度、衍字が4箇所程度ある。

5、くずした時に字形の近似する文字が多く誤認されている。

6、速度感を重視した運筆によるケアレスマスである。

7、「寒」は橘守部『萬葉集檜婦手』の思い切った意改「寒<sup>ヤムカラマツニ</sup>有卷尔」を裏付けるものとされ、今日多くの支持を得ている。しかし、これも定信の書写の姿勢からすると「寒」は「塞」の誤写である可能性が高い。「寒」を金沢本のみに拠り、さらに諸本で一致している「為」を「有」と改めることは再検討する必要がある。

8、諸本の一致している本文が、本文校訂と訓読のための確実な出発点であると言える。

とあり、「寒」は誤写で、「塞」が正しいとする説に全幅の信を置きたい。

賀茂真淵の、

凡古書はたとひ誤字とみゆとも多くは其まゝにして傍に私の意をは注し付へし、己は誤也とおもふ文字も却て正義なる後賢の辨出来んも知かたければ也、(『萬葉解通釋并釋例』<sup>9)</sup>)

に従えば、底本を主として、本文「塞」とし、

塞―寒(金・緊・桧)

と、注記すべきことを示しているといえよう。

さて、私案は、「塞」説で、澤瀉久孝『萬葉集注釋』・久松潜一『万葉秀歌』に賛同したい。<sup>(10)</sup>

但馬皇女薨するの後、穗積皇子、冬の日雪落るに、遙かに御墓を望みて、悲み傷み涕を流して作りたまひし歌一首

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の塞ならまくに（２・二〇三）

この一首の「塞」は、但馬皇女との禁断の恋の関係を背景に読むことが求められている。<sup>(11)</sup>

但馬皇女の、高市皇子の宮に在りし時に、穗積皇子を思ひて作りたまひし歌一首

秋の田の穂向きの寄れる片寄りに君に寄りな言痛ありとも（２・一一四）

穗積皇子を勅めて、近江の志賀の山寺に遣はせし時に、但馬皇女の作りたまひし歌一首

後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へわが背（２・一一五）

但馬皇女の、高市皇子の宮に在りし時に、窃かに穗積皇子に接はりし事、既に形はれて作りたまひし歌一首  
人言を繁み言痛み己が世にいまだ渡らぬ朝川渡る（２・一一六）

#### 穗積皇子の御歌二首

今朝の朝明雁が音聞きつ春日山黄葉にけらし我が心痛し（８・一五二三）

寒か塞か

秋萩は咲きぬべからし我がやどの浅茅が花の散りゆく見れば（8・一五一四）

但馬皇女の御歌一首 一書に云はく、「子部王の作」といふ

言繁き里に住まらずは今朝鳴きし雁にたくひて行かましものを 一に云ふ、「国にあらずは」

穂積親王の御歌一首

家にありし櫃に鏤刺し藏めてし恋の奴がつかみかかりて

右の歌一首は、穂積親王の、宴飲の日に、酒酣なる時に好みてこの歌を誦ひ、以て恒の賞と為ししものなり。

とある一連の歌群の一首として読むとき、結句は「塞ならまくに」と訓むことによつて、二人の塞かれた恋が、但馬皇女の死後もなお、生きながらえている穂積皇子の身心に、冷酷非情な雪の障壁（＝塞・関）となつてゐることを歌つたものと理解できるのではないだろうか。

「寒」説を取る方々の、論理的・実証的・明解な説明責任を果すことを期待して欄筆。

注

- （1）翻刻釈文（池田利夫）に「寒」とあるが、本文は「ン」ではなく「ミ」とある。  
 （2）『萬葉集総釋』巻第二（土屋文明）に、

此の歌は初句から雪を擬人して居るのであるから、塞ナサマクニでも不都合はない。文字を代へて寒カラマクニとも訓んで居るが、文字を代へるのが不都合な上に、歌としても餘り理に堕ちてこせつて来てよくない。

「塞」と「寒」との文字を較べると今日の活字としてはや、離れてゐるが、筆寫の文字としては極めて相接近した字形である事金澤本の書體を見てもわかるが、しかも誤寫の順序からすれば「塞」より「寒」へと考へる事が、その逆よりも自然である事

とある。

(3) 嘉永元(一八四八)年三月廿日序あり。『<sup>増補</sup>橘守部全集第四』(昭和四十二(一九六七)年九月、東京美術)に拠る。

(4) 『萬葉集檜婦手』の七年前、天保十二(一八四一)年十二月序。十三年二月跋あり。

(5) 明治三十四(一九〇一)年五月十六日、光風館刊。昭和四(一九二九)年訂正四版の影印本(昭和五十九(一九八四)年七月二十五日、勉誠社刊)に拠る。

(6) 橘守部・木村正辭、ともに「金沢本」の知見はなかったはずで、『萬葉集美夫君志』首卷總說中、「文字を妄に改むまじき事」・「古訓をあなづるまじき事」等の言說に依れば、守部の恣意的な改変を妄說として「今一説として出しぬ」としたのである。なお、廣岡義隆氏より、未読の『萬葉集讀例』(慶応三(一八六七)年自筆稿本。岩崎文庫、東洋文庫蔵)のコピーを添えて、「旧訓が正しい本文を伝えている事例があるということ指摘しているものであり、金沢本という限られた一伝本に過ぎませんが、その本文の誤写をその訓が照射しているということになるかと思ひます。」との御示教をいただいた。

(7) 参考までに、木下正俊「萬葉集写本の意改」(『文学』48巻2号。昭和五十五(一九八〇)年二月)・同「萬葉集古写本の本文改変」(『國文學』67号、平成二(一九九〇)年十一月、関西大学国文学会)。佐竹昭広「萬葉集本文批評の一方法」(『萬葉』4号、昭和二十七(一九五二)年七月)・『萬葉集拔書』(昭和五十五(一九八〇)年五月)・『萬葉集再讀』(平成十五(二〇〇三)年十一月)・『佐竹昭広集』(全五巻、平成二十一(二〇〇九)年六月・平成二十二(二〇一〇)年二月)のいずれにも「二〇三番歌」に関する明確なる論考は見当らない。

(8) 前野貞男『萬葉訓点史』(昭和三十三(一九五八)年十一月)参照。

(9) 寛延二(一七四九)年成立。『賀茂真淵全集 第六巻』(昭和五十五(一九八〇)年五月、続群書類従完成会)に拠る。

(10) 拙稿「但馬皇女と穂積皇子」(有精堂版『萬葉集講座第五巻作家と作品I』(昭和四十八(一九七三)年二月。後、拙著『萬葉

歌人の研究」(昭和五十八(一九八三)年一月、所収。)に、

結句「寒からまくに」は原文「塞為卷尔」とあるので「せきなさまくに」と訓んで、雪が関となってお会いしに行けなくなるだろうからの意とする説(注4)があるが、橘守部(注23)にしたがって「寒」ととりたいたい。

とし、拙著『古代詩万葉とその周辺』(昭和五十一(一九七六)年三月)に「寒からまくに」とし、脚注に、

原文、塞為卷尔とあり、セキナサマクニと訓んで、雪が関となってお会いしに行けなくなるだろうからと解する説もあるが、寒の誤まりとして、寒いだろうから、の意。

としたが、その後、拙稿「国禁(禁断)の恋」(高岡市万葉歴史館論集11『恋の万葉集』平成二十(二〇〇八)年三月。後、拙著『萬葉歌人の伝記と文芸』(平成二十七(二〇一五)年十二月、所収。)に、本文中「寒からまくに」としたが、「注4」に、結句の原文、西本願寺本及び古写本の多くが「塞為卷尔」とし、「セキナラマクニ(考・略解)・「セキナサマクニ(古義・注釋)」と訓まれている。金沢本にのみ「寒」とあり、訓は「セキ」であるが、『桧婦手』が「寒有卷尔」と訓み、現行の全注・釋注・新大系など「寒」で「サムカラマクニ」と訓んでいる。私注・注釋は「せき」で、黒澤幸三「穂積皇子と但馬皇女」(『文学』46巻9号、昭和五十三年九月)・影山尚之「但馬皇女挽歌の再検討―その儀礼的背景」(『上代文字』67号、平成三年十一月)も「セキ」説であり、「塞」とあるのが良いと思う。「寒からまくに」ではあまりにも発想が常套的で陳腐である。二人の恋は、生前「塞」かれた恋で、皇女の死後なお「蔵にカギを刺し閉じこめて」おかなければならない恋であることを思えば、「寒」よりも「塞」がふさわしいといえよう。

と変更訂正した。それをさらに考究したのが本論考である。なお、蝦名翠「但馬皇女・穂積皇子」(歌物語)考」(国語と国文学)84巻1号、平成十九(二〇〇七)年一月)がある。

(11) 注10に同じ。